

立って、読む人が引き込まれるような書き方をしなければ。「今朝、あなたの夢を見て目覚めました。そういえば言いたいことがあったのだと、あなたが夢で思い出させてくれたのです」——このくらい思わせぶりな方がいい……たぶん。

思わせぶりに書くのだから、持って回った表現を使えざるを得ない場面も出てくる。馬鹿っぽく見られたくない。使い慣れない表現を使おうとして間違っている、叶う恋も叶わなくなる。漢字だって間違えたら台無しだ。辞書は座右に置いておきたいもの。

使い慣れない表現ばかり使っていると、そのうち枯渇する。絞っても絞っても言葉が出てこない。そんな極限状況がやって来る。——でも大丈夫。図書館に行ってみよう。「文学」という棚があるだろう。「日本文学」でも「外国文学」でもかまわない。任意の一冊を取り出し、ページをめくってみよう。かなりの高い確率で、君はそこでラブレターに使える表現に出くわすはずだ。借用したりちょっと言い換えたりして使ってみるといい。使ったことのないような表現を使ってみると、君自身の世界が変わるはずだ。

新しい表現を発見するということは新しい世界の見方を得るということだ。愛する人の新たな魅力に気づき、それを愛する人自身に気づかせるということだ。

それがラブレターを書くことの効用。かつてフランスの哲学者J・P・サルトルは「言葉でもって世界を見せてあげる」と言って女性たちを口説いた。面と向かってやっているのは、ボロが出ることもあるだろうから、たっぷりと準備のできるラブレターでやってみよう。



やなぎはら・たかあつ 一九六三年生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授。スペイン語圏の文学・思想・文化論著書に『ラテンアメリカ主義のレトリック』（新宿書房）、『劇場を世界に——外国語劇の歴史と挑戦』（共編著、新宿書房）、『訳書にアレホ・カルペンティエール『春の祭典』（国書刊行会）、フィデル・カストロ『チェ・ゲバラの記憶』（監訳、トランスワールド）、『ホセ・マルチ選集1』（共訳、日本経済評論社）など。

ラブレターのすすめ

柳原孝敦

本当は「恋愛のすすめ」とでもやった方がいいのだろう。実際、「恋愛のすすめ」もしたところ。しかし、世の中には確実に恋愛不適合者というのがある。私のように。そしてまた、そんな私がわざわざすすめなくとも、既に恋愛依存の人もいる。恋愛依存の人も恋愛不適合者も普通の人も、誰にでも等しく胸を張ってすすめることができるのが、ラブレター。とりわけ若い方にはラブレターを書くことを強くおすすめする。文字どおりの手紙でなくてもいい。何ならメールでもかまわない。ただし、机に座って書く環境は確保したいところ。だから、携帯電話のメールだけは念頭から外しておこう。何しろラブレターだ。愛する人へ書く手紙だ。シャンとして書きたいじゃないか。「襟を正す」とはそういうことだ。そういう姿勢を取りたく

なることもラブレターをおすすめする理由のひとつ。背筋を伸ばして机につく。それだけで愛は強まる。

書くなら断然、朝がいい。夜はいけない。夜は妄想の歯止めを外す。「私はあなたを愛しています」ではすまなくなる。ここには書けないようなことまで書いてしまう。筆が滑るのだ。あまり書きすぎると読む側は恐怖を感じる。ほどほどにしないと。だから、冷静になれる朝がいい。もし間違って夜に書いたら、翌朝、必ずそれを読み返すこと。

さて、朝の静寂のなかで書いてみよう。「私はあなたを愛しています」——これはただけない。直截的にすぎる。読む楽しみがなくなる。ラブレターとは愛する人に読ませるものだ。自分の言いたいことを言っ
てしまえばいいというものではない。読む人の立場に